

男慣れするためにレンタルおじさんとピュアデートしていたのに、時間外労働で本性を現され、処女まんこなのに歪んだ純愛でいっぱいイク♡イク♡させられちゃった話

サンプル（一部抜粋）

「…ふう…ドキドキする…。」

明るい駅前。

噴水の前でスカートの裾を握りしめ、レンタルしたおじさんを探すために、キョロキョロして周りを見渡す。

おじさんをレンタルだなんて、と人は思うだろうけど…こんなおかしい事をしているのは、苦手な男性を克服するため。

中学から大学まで、女子しかない学校で生活してきた事もあって、男性とはそもそも関わる事がかなり少なかった。

学生時代はそれで困るようなこともなかったし、平和だったんだけど…そんな私も社会人になり、男性が沢山いる職場に勤めるようになった。

男の人に囲まれて仕事をするようになって、一番初めに思ったのは…男の人って怖い…だった。毎日上司や先輩の大きな怒鳴り声が響いて、それを耳にするだけで胃がキリキリする。

かと思えば、

「彼氏いるの?」「今日、二人で飲みに行かない?」「夜はどうなの?」なんて下品な話をしてくることがあって…正直困る事が多い。

上手くかわせないし、いつもビクビクしてしまうし…もう職場に行くのが嫌だなと思うほどに私は疲弊していた。

ただ、周りの同僚の女の子は、軽くかわしてるし…きっと私が悪いんだろうな。

なんでも真に受けて、ビクビク怯えて、煮え切らない態度で……。

そんな自分を変えたいと思っていた。

(中略)

えっと49歳の男性…か。名前は修司さん。

優しそうな見た目で、整った顔のイケオジ…。

身長が183センチ。たかっ…!

標準サーブिसが、手繋ぎとハグ。

これは要らないよね。うん。

でもこの人なら優しそうだし、一緒にいてもそこまで緊張しないような気がする…。

（中略）

「景色綺麗だね。」

修司さんは爽やかな声でそう言いながら、ゆっくりと指と指を絡め、気が付くと恋人繋ぎをしてしまっていた。

ぎゅっと交わった指から伝わる修司さんの熱が、私へと移る。

「景色どころじゃ…ないです…」

私は同じだけの力で手を握り返し、顔が真っ赤になっているのを感じながら、俯く。

「…可愛いね、雪ちゃん。」

「……」

恥ずかしい。もうパニックになって逃げ出したいくらいドキドキする。

「…雪ちゃん。」

修司さんは身体を私の方へと向け、繋いだ手をぐっと引っ張った。

「っ……！」

そのまま引き込まれるように、修司さんの胸に顔を埋めてしまう。

柔軟剤の良い香り、妙に熱い体温。どくん…どくん…と低く響く穏やかな心音。

これもサービスだって分かってる。標準サービスなんだって。

修司さんは固まったように動かない私を見下ろして、くすつと小さく笑う。

「…可愛いね。ほんと。」

甘い声が、ねつとりと身体を撫でるように響く。

そのまま修司さんは空いた手で私の頭を撫で、そつと綺麗な指で頬をなぞられる。彼の胸からゆつくりと顔を離し、ドキドキしながら修司さんの顔を見つめる。

修司さんの瞳は周りが暗いからか、妖しく光っているように感じた。

ただ口角は上がってるし、きつと……周りが暗いせいだと思った。

修司さんの指が頬から耳へと移動していく。

ねつとりと耳を撫でられ、理由は分からないけど…身体がびくつと震える。

「っ…あ……」

「…耳、熱いね。」

修司さんの声が、さつきよりもわずかに低くなる。

「はずか…しい…っ…」

「どうして？ただ、よしよししてるだけだよ。」

「…っ、…は…あ……」

耳をなぞるぞわつとした小さな摩擦音が鼓膜に届く度に、得体の知れないぞくぞく感が身体を駆け巡る。

でもそれが…嫌だとは思えない。

修司さんはそのまま私にぐつと顔を近づける。

キスされそうな距離…。それはサービスにないよね……？

脳内は大パニックを起こしていて、身体を動かせない。

ただ…なぜか分からないけれど…私はゆっくりと瞳を閉じてしまっていた。

真っ暗になった視界。何も見えない世界で、修司さんの熱い体温と柔軟剤の匂いだけがまとわりつくように、身体を支配していく感じがする。

だけど次の瞬間、耳から修司さんの手が離れ、唇をむにゅつと押される感覚がして、目を開けた。

修司さんはくすつと笑って至近距離で私の顔を見つめながら、私の唇に指を押し当てていた。

「っ……」

吸い込まれそうな、溶かされそうな…熱く妖しく光る瞳。

わずかに男の匂いが強くなったような気がする。

「…そろそろ時間だよ。雪ちゃん。」

修司さんはそう言いながら、ゆっくりと私から顔を離す。

「え、あ……」

私、今何を期待した……？なんで、目を閉じちゃったんだろう…。男の人が怖かったはずなのに……なんで修司さんにはこんなに警戒心を解いてしまうの……？

自分の行動の理由が分からなくて、混乱した頭のまま俯く。

「…出ようか。」

「…は、い……」

（中略）

寂しいけど…レンタルってそういうことだと思うから。

あくまで仕事として、私を大切にしてくれていただけに過ぎないから。

これで会社の男性と普通に話せるようになったとは当然思えないし、相手が修司さんだからこんなに楽しかっただけで……修司さんがただ特別なだけだったから……。

だけと離そうとした手を、修司さんはぐっと強く握り直した。

「え……？」

びくつとして顔を上げて修司さんの顔を見る。

修司さんはふうつと息を吐いて、ねつとりと私を見下ろす。

その表情が、さっきまでの優しさに溢れた顔とは違って…なんだろう。男の色気と意地悪な雰囲気のにじみ出ているように感じる…。

一瞬にして捕食者へと変貌したような…そんな恐ろしい雰囲気。

「修司…さん…？」

わずかに私の声が震えている。

修司さんはねつとりとした視線で私を見つめたまま、

「やっと終わった。」

と冷たく低い声を発した。

背中がぞくつとする。脳が違和感を察知して、警告音を鳴らしている。

危険だ……本能的にそう感じた。

なのに、繋いだ手を薙ぎ払う事はできなかった。

半日のデートが私をおかしくしたのか、それともただ恐怖で動けなかったのか…分からないけれど、修司さんから視線をそらせない。

「もう遠慮しなくていいよね。」

（中略）

「クリ、これだけ勃起してたら、簡単にイけそうだね。」

褒めるような修司さんの声が耳に届いた瞬間、

じゅるじゅるじゅるっつ!!

と激しい吸う音が響いた。

「んぐあああああつつつ」

ビリビリと襲い掛かる強烈な快感。

喉の奥から、人生で出した事もないような絶叫の音が放たれる。

「…あー…えっちな味がするね。雪ちゃん。」

修司さんはそう言うのと、ちゅうっ♡とクリを吸い、口の中でぬちっ♡ぬちっ♡と舌を動かし始めた。

「ひ、ぎ、ああ、あ、や、それ、やだっ、そこ吸っちゃだめっ、え、あああつつ」

抱えきれない快感を逃がすように、必死に両手でシートを握る。

身体がのけぞって、涙がスーッと耳へと垂れていくのを感じる。

それでも修司さんの唇は、私のクリから離れてくれない。

ごりっ♡ごりっ♡と口の中で敏感なクリの先端を弄ばれ、身体が熱くおかしくなる。

「あ、あ、あああああつつ、だめ、なんかきちゃう…う、あああああつつつ!!」

パチンと頭の中が弾けるような感覚と共に、身体が激しくびくん♡と痙攣し始める。
下腹部が脈打つようにビクビクしていて、

「あ、…あ、あ……」

と小さな呻き声が漏れてしまう。

「…上手にイけたね。」

修司さんはちゅっと音を立てて私のクリから口を離し、優しくそう呟く。

その表情は出会った時と同じように優しいのに、腫の温度は比べ物にならないほど熱くて、恐ろしかった。

「は…あ、あ…っ、修司さ…ん…っ…もう…やだ…っっ…」

「……」

「クリがむずむずするの…っ、変になっちゃった…から…っ…、許して……」

何も言わずに私を見つめる修司さんに、身体をヒクヒクさせながら必死で赦しを請う。

これ以上おかしな事になるのが怖くて、自分が自分じゃなくなるのが怖くて、もう逃げ出したかった。

そのくせ、大股を開いたまままで…そんなちぐはぐ感も嫌だった。

修司さんはそんな私をねっとり見つめながら、くすつと楽しそうに笑い始めた。

「……？」

「はは。」

雪ちゃん。もしかして煽ってる？」

「え……？」

「可愛いね。クリ、むずむずするの？」

笑いながら、修司さんは服を脱ぎ始める。

「っ……」

引き締まった身体……。広い肩幅。

大人の男の色気にくらくらしながら……、修司さんの問いかけに何度も頷く。

私の返答を見て、楽しそうに笑いながら、カチャカチャと外されるベルト……。

「しょうがないな。」

直してあげる。」

（全容は製品版にて）